JILIS

第５回情報法制シンポジウム　Day1 開催報告 「テーマ①：AIが作る著作物」

一般財団法人情報法制研究所　事務局

開催報告

情報法制研究所（JILIS）は、2021 年 7 月 11 日（日）から 22 日（木）にかけて、第 5 回情報法制シンポジウムを開催した。新型コロナウィルスの感染状況を考慮し、本シンポジウムは昨年に引き続きオンラインでの開催となった。

ここでは、上記期間中に実施された計 3 回のうち、AI が作る著作物をテーマとした Day 1（7 月 11 日（日）開催）の様子を振り返ることとしたい。

なお、文中意見にかかる部分は、筆者の意見であることをあらかじめ申し添える。

鈴木 正朝氏（JILIS 理事長・新潟大学 教授）の挨拶で開会し、はじめに、川村 秀憲氏（北海道大学 教授）より「人工知能が俳句を詠む：AI 一茶くんの挑戦」と題して報告が行われた。

人口知能の研究者である川村氏は、AI により俳句を生成するプロジェクトを 2017 年に開始している。「AI 一茶くん」と名付けられた俳句を詠む人工知能の原理は、過去の俳句を単語に分解して深層学習させるというものであり、当初、作品のレベルは決して高くなかったが、教師データを徐々に増やすなどして拡張していったと説明した。

その後、NHK の番組企画などを通じ、2 回の AI 一茶くん対人間の俳句対決を行った。いずれも全体としては人間に軍配が上がったものの、2 度目の対決では作品ごとの評価において AI 一茶くんの作品が最高点を獲得するなど、芸術的価値のある俳句を生成でき、人間と遜色がないレベルで俳句が詠めるようになったと述べた。一方で、古典俳句を学習しているためどうしても作風が古い、発想を飛ばせていないといった弱点も挙げた。

また、AI 一茶くんは 1 時間に最大 20 万弱もの俳句を生成可能だが、”100 句に 1 句はそれなりのものがある ” というのが現状であり、最後は人間による選句に頼っていると説明した。そのうえで、AI が作ったものに著作権が認められるかについては議論があるものの、生成されたものの中から人間が選ぶのであれば、人間による創作行為が介在しているといえるのではないかと、『虚子俳話』から引用しつつ指摘した。

なぜ題材として俳句を選んだかについては、明確なルールや理論的な神の手が存在する囲碁と異なり、人間による解釈・評価が不可欠であり、また、季語による本意・本情の共有知識化が重要であることから、人間と AI の両方がシステムとして存在する必要があるという、俳句ならではの世界観を理由として挙げた。また、記号接地問題やフレーム問題などが生じる可能性もあるとして、研究対象とする意義も併せて語った。

今後の課題については、AI 一茶くんが生成した俳句を人間に楽しんでもらいつつ、人間による俳句の評価を集めて学習させ、単に詠むだけでなく AI 自身で評価が行えるようにすること等を挙げ、AI 俳句協会の取り組みを通じて、人間と AI が相互作用しながら研究を進めていきたいとまとめた。

続いて、松原 仁氏（東京大学 教授）が「AI が小説を書く」と題して報告を行った。

松原氏は、2012 年から実施している「きまぐれ人工知能プロジェクト 作家ですのよ」について紹介した。同プロジェクトは、コンピュータに星新一作品のようなショートショートを創作させることを目指すものであり、実際に 2015 年の第 3 回星新一賞において、人間とコンピュータ共同の創作作品が一次審査を通過しているとした。

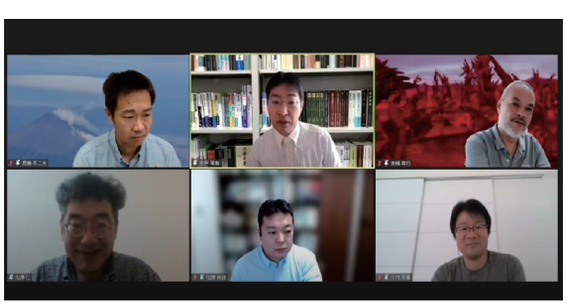
AIによる創造については、音楽や絵画の分野ではすでに研究が進み、一定の水準に達している一方で、制約条件が少ない散文分野は世界的に研究も少なく、試みも上手くいっていないと述べた。星新一を選んだ理由については、ショートショートの神様と称されるとおり短い小説が主であり、文章の構造が比較的はっきりしていて扱いやすい点、多作作家であるという点に加え、著作権者である遺族の協力を得られた点が大きかったと説明した。

システムの開発に当たっては、お手本となるようなショートショートをまず人間が作り、それを生成できるように逆算的にプログラムを作成したと説明した。

同プロジェクトでAIにより作成された小説の著作権については、人間とAIの貢献割合を一つのポイントとして挙げ、人間が貢献している以上は現行ルールでも著作権が担保されるだろうとしながらも、仮にAIの貢献割合が100％となれば問題が生じると指摘した。同時に、コンピュータが作品を自発的に書き始めることはなく、作成には人間による何らかの行為が介在するため、「AIの貢献割合100％」はありうるのかという問いを投げかけた。また、生成した作品が人間の作品の影響を受けている場合、どこまで問題になるのかという論点も提示した。

また、AIは少しずつ設定が異なる小説を短時間で10万作品ほど出力できるが、1作品を作るのに長時間を要する人間とのあいだで、同一レベルで著作権を考えてよいのかと問題提起しつつ、人間とAIによる合作作品である限りは、現行のルールでも問題は生じないのではないかと示唆した。

最後に、人間をAIが支援して漫画やゲーム等のコンテンツを創作することを目指す2020年に始まったプロジェクトを紹介し、AIはあくまで人間の創作を支援するに過ぎないことから、当該プロジェクトによる作品についても人間に対する著作権で著作物が守られることになると述べ、続くパネルでの議論につないだ。



両氏による報告を踏まえ、鳥海 不二夫氏（JILIS理事・東京大学 教授）の司会のもと、パネルディスカッションが行われた。ここからは、加藤 尚徳氏（JILIS 上席研究員・株式会社KDDI総合研究所アナリスト）、宍戸 常寿氏（JILIS 参与・東京大学教授）、実積 寿也氏（JILIS 理事・中央大学 教授）が参加した。

最初に、AIが作るものについて誰がどう著作権を持つべきかについて鳥海氏が問いを投げかけると、川村氏は、感情や思想を表したものが著作物であり、AIが作るものは著作権以前に著作物といえないのではないかと示唆した。そのうえで、選句等により人間が関わる場合は人間との合作ということになり、現在のフレームワークでも著作物になるのではと述べ、まずは何が著作物であるかが整理されるべきとした。

松原氏は、AIによるパーソナライズの容易性を挙げ、たとえば連続小説を個々人の好みに合わせて作成・配信することも容易に考えられるとし、こうしたビジネス的な可能性がある場合に、AIが作ったものだから権利が与えられないとするのは釈然としないと述べた。その一方で、人間が作る数とAIが作る数のオーダーには大きな差があることから、同一のルールでは人間の創作活動が委縮しかねず、配慮が必要ではないかと語った。

松原氏のコメントをうけて宍戸氏は、法的保護の必要性と創作活動への影響のバランシングが必要で、何が損なわれることを危惧して法的保護を与えるのかが重要であり、単に著作権法に落とし込むというやり方だけでなく、"AIデジタルコンテンツ著作権法"といった新しい枠組みも考えられるのではないかと指摘した。

また、川村氏は、人間が介在する／しない等、創作過程が明らかでない場合の著作権の判断の難しさについて問いかけた。

これに対して加藤氏は、AIの開発者・利用者のいずれかに著作権を認めることになるだろうとしつつ、著作権法における「選択の幅」論を紹介し、生成される作品の数があまりにも膨大な場合には、偶然の一致だったかどうかも含めて依拠性を見ていくことになるのではないかと述べた。

さらに、人間の創作活動への影響について川村氏は、もともと俳句は有限であり、やがて出尽くすという話は以前からあると紹介したうえで、俳句を作る人々は未発表の俳句を作ることを必ずしも目的としておらず、句会を通したコミュニケー

ション等を楽しみに行っている面もあることから、AIの存在により俳句を嗜むという行為がつまらなくなるとは必ずしもいえないと語った。このほか、AIにより違ったスタイルや表現などが生まれ、俳句の地平線が広がっていく可能性についても指摘した。

実積氏は、AIにより、俳句を作る行為より選ぶという行為が価値を持つようになり、ビジネスが変わっていくのではないかと示唆した。すなわち、AIにより「俳句を詠む人」ではなく「セレクションする人」にお金が支払われるようになるが、どう詠み手にお金を戻していくかを考える必要があると問題提起を行った。

これに対して松原氏は、AIによる作品の登場により、人間ならではの俳句／人間ならではの小説が生まれればビジネスとして保ちうるのではないかとし、人間らしい作品／AIらしい作品という新しい棲み分けに期待を込めた。

鳥海氏は、当面はAIと人間の合作が続き、合作した人間に対して権利が与えられ、ツールとしてAIが使われるというかたちのコラボレーションが進んでいくだろうと述べ、ディスカッションを締めくくった。

末尾となるが、開催に向けてご尽力いただいたすべての関係者に謝意を表し、本シンポジウムの開催レポートとしたい。

第 5 回情報法制シンポジウム　Day1 「テーマ①：AI が作る著作物」

日 時：2021 年 7 月 11 日（日）14:00 ～ 16:00
会 場：オンライン開催
共 催：情報法制学会（ALIS）

プログラム

司会：鳥海 不二夫（JILIS 理事・東京大学 教授）

14:00 ～ 14:05	開会挨拶 鈴木 正朝（JILIS 理事長・新潟大学 教授）
14:05 ～ 14:45	報告 1「人工知能が俳句を詠む：AI 一茶くんの挑戦」 川村 秀憲（北海道大学 教授）
14:45 ～ 15:25	報告 2「AI が小説を書く」 松原 仁（東京大学 教授）
15:25 ～ 15:55	パネルディスカッション 司会：鳥海 不二夫 パネリスト：加藤 尚徳（JILIS 上席研究員・株式会社 KDDI 総合研究所 アナリスト） 川村 秀憲 宍戸 常寿（JILIS 参与・東京大学 教授） 実積 寿也（JILIS 理事・中央大学 教授） 松原 仁
15:55 ～ 16:00	まとめ・閉会宣言 鳥海 不二夫